

---

# エンドレス・レイン

ジャガランディ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハンドレス・レイン

### 【著者名】

ジャガランディ

N1-8333F

### 【あらすじ】

ずっとずっと…。止まない雨の中で夢を探していたんだ。

「これでは2年生には上がれんな……。」  
先生は渋い顔で赤色のアルファベットが並んだ成績表を僕の前に投げるように差し出した。

「もう一度1年生をやってもいいが、先生は諦めて違う道を探した方が良いと思うな。君にはやる気が無さすぎる。」

やる気か。やる気なんてある訳ない。

僕はこうなる事はアンタに言われなくても分かってましたよ。と言わんばかりの涼しい顔で

「退学します。」と答えた。

学校の外に出るとすでに夜になっていた。ポツポツと降りかけてた雨が次第にどしゃ降りになり、街には何かに追われるようになに必死に走る人で溢れ何だかせかせかしていた。

僕は走り行く人達の邪魔にならないように歩道の隅っこをゆっくり歩きながら駐車場へと向かつた。

駐車場へ着いてクルマに乗り込みエンジンを掛けるとなぜだか分からぬ性に泣けてきた。

学校を退学になつたから泣けたのか?いや違う。退学になつたのは学校をサボつてばかりだったからだ。最初からこうなる事は分かっていた。

友達と分かれるからか?友達なんて居やしない。

じゃあなぜ?何だか分からないけど涙が止まらない。悲しいという感情ではなく、不安や恐怖に似た気持ちだった。

しばらくクルマの中で呆然としていた。カーステレオから流れる軽快なロックがうるさく聴こえる。何も考えたくない。

1時間位経つた時、ポケットの中のケータイがブルブル震え出した。

母からのメールだった。

『さっき学校から電話がありました。眞面目に学校行つてるものだと安心していたから母さんびっくりしたよ。とりあえず早く帰つて来なさい。お父さんと一緒に話しあいましょう。』

このメールを見た瞬間、また涙が溢れてきた。親に無理矢理行かされた学校だつていうのをずっと言い訳にしてきていたんだ。申し訳ない気持ちと恥ずかしい気持ちで胸が締め付けられて息が苦しくなった。

それから30分後、ようやくサイドブレーキを解除した。ガソリンのメーターは真ん中より少し下を指していて、CDはとっくに全ての曲を演奏し終えていた。

人と車でぐひゃぐひゃになつた名駅通りをすり抜け、国道22号線に乗つた。

信号が赤だつた事を交差点を渡りきつてから気が付く程まだ頭の中は偶然としている。

降りしきる雨で視界もどんどん悪くなつていいく。

「事故つて死んでしまえばいいのに…。」  
と心の中で呟いてみた。

クルマの中は何となくハロウインを聞きながら口ずさむをしていた。その声はマイケル・キスクのオペラのような美しい声とは真逆の今にも死にそうなデズヴォイスであった。

名古屋から大垣までの40キロの道のりが今日はやけに近く感じた。どしゃ降りだった雨は一層激しくなり、スコールとなつて不気味な夜だ。ヘッドライトに照らされた雨粒が針のように地面に突き刺さつている。

家に着いた時には22時を回っていた。

車庫にクルマを入れ、そつと玄関のドアを開けて2階の自分の部屋へと泥棒のような足取りで向かった。

部屋に入るなり、バタンとベッドにうつ伏せに倒れこんだ。まだ頭の中がボーッとする。

何気なくオーディオの電源を入れて再生してみると、たまたま入っていた銀杏BOYZが爆音で流れ始めた。

銀杏を2・3曲聴いたところで部屋のドアが開いた。母さんだ。

「おかえり…。」

「あ…。」

「台所に夕飯があるから温めて食べなさい。それ食べたら話しあしましょ。」

僕は台所に行つてすっかり冷めきったコロッケを食べた。いや、トンカツかな? どちらでもいいや。味が全くしない。

食べた気がしない夕食を済ませてリビングに行つた。

母さんはソファに座つて俯いている。父さんは寝転がつてニュースを観てこる。

僕は寝転がつている父さんの横にチヨコンとあぐらをかいた。

「ごめん。」

かすれた声でとりあえずあやまつてみた。

少し間をおいて母さんが口を開いた。

「学校、辞めてきたんだって？」

「うん…。」

「先生は何て言つてたの？」

「2年生に上るのは無理やから留年か退学か選べつて。」

「それで退学を選んだの？」

「うん…。」

父さんがテレビを消して起き上がつてタバコに火を着けた。  
「ま、やる気がねえなら留年したつて無駄つてこつたな。」  
ため息まじりで父さんが言つた。僕は黙り込んでしまつた。  
「んで、辞めたのはええけど、どうすんや？これから。」

「まだ…。分からん…。」

と答えると父さんは立ち上がりて僕のパーカーのフードを掴んで言つた。

「出でいけ。お前の面倒はもうみれん。」

僕は外に放り出され、玄関には鍵を掛けられた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1833f/>

---

エンドレス・レイン

2010年10月16日20時46分発行